ミオヤの光

徳本の巻

目次

一、道徳律根底＝神聖＝戒
二、法華三周の説
三、惑
付録　辨榮上人御逸事（其三）

道徳律根底。＝神聖。＝戒。

道徳律の淵源を神に求めば、圓戒の體は自性清淨の體、本垢染なし。本理の心地清淨にして過なし。是非善惡を超絶して本然清戒天眞、之を本性本有金剛寶戒と名づく。之の理體を顯はす觀を中道の妙觀と名づく。而して戒とは即ち非を防ぎ惡を止の義なれば本性清淨には本非惡の働きはない。そが見聞覺知の六識と念々活動の妄我なる七識が眞理に違背して起念する時は惡と現ず。戒相とは性德の衆行が働に出でて身口の作用に現はれて眞理に契ふを戒相と謂ふ。戒法とは正く實相の儀に住して三業を勉め內と相應するを云ふ。妙樂は三觀が身と口との現はすを戒相とし三業が理と相應するを戒法と云ふ。

常に觀心明了にして理と慧と相應じ所言所行の如く所行所言の如く三觀の心地言語が相應し舉足下足皆實相と相違せず。

道德律の根底は神聖其本體にして本門と迹門とあり。本門は性海果分の戒體は源、本門壽量三身即一に出づ。其所以は本門壽量に諸法を談ずるに事々圓滿、十界事具、即ち本地無量劫來或は依報と成り或は正報と成り十方諸佛及び國土淨穢法界有情森羅の諸法は悉く是一佛同體の變作なる事を。本地佛眼の照す所に依れば一切有情世間事々當處即ち本地三身の所爲にして衆生業力の爲す所でない。是を本門事圓即身成佛と云ふ。故に戒體を定むるに有情の善惡悉く三身の所爲、舉足下足動作威儀も本來毘盧之妙體當體即ち圓頓の妙戒。

如來如實に三界の相を知見するに無有生死是即三界名相本來初自性本具戒者一切衆生本來佛性戒に住す。佛性とは十界互具心此互具心本佛性なり。變じて地獄或は饑鬼畜生等と爲る。如是三惡生死皆佛性力用全性修現即ち、性具色法乃至法身一分。心即覺知三惡の依正乃至般若の一分、死此生彼、生死往返、即解脫力用、豈是由＝煩惱業力一爲レ之哉、當知三惡受生皆是佛性威儀、佛性示現は同＝等覺示色一、豈名レ惡耶、三惡已然三善三乘悉佛性力用、本具無作威儀戒、名＝圓頓理則戒一。

受得戒。四人不同。一名字即、二觀行即、三相似即、四分眞等覺、名字但即佛法名字を聞て未た其義を解せず、但信法心即名受得人、解了戒は戒體實相戒相色法上具＝戒行一、

觀行相似戒行與理觀實相相應分眞等覺戒色身遍現九界、或至三惡示不善威儀、或生人天示＝戒善一威儀應＝三乘一亦復如是、是則化侘滿足戒善惡風聖示現＝種々形相一悉是無作圓滿戒是上來四種有情即入佛位、圓頓戒四種相承、戒體戒相戒法戒行。

戒體。中道實相。大師判曰中道妙觀戒之正體上品清戒、究竟持淨。戒相は心業三觀顯發成身口二業戒相自顯。三戒法。戒法式三觀心地與三業相應、三業與無作假相應則六趣諸法善惡有法悉是戒法。四戒行。一切諸法善惡凡聖有行悉爲戒行。

一心金剛戒體

法華主　此經難持、若暫持者是名持戒行頭陀者是持法華經名爲持圓戒」。法華經者指實相理實相者是善惡不二迷悟一如不出一念本具諸法、此是唯佛與佛妙覺自報之智體、修因感果之如來、是中道之佛智、寂照不二。此智體より任運に觀照を起し一に道種智を下して法界を觀照し而も二差別にして諸法宛然たり。故に知る前の佛智は則ち果、次の道種智は則ち因、因は即ち居二九界一等覺と爲。九界即覺體と顯はす。果は則佛界に居す。之を妙覺と爲。等覺即妙覺と顯はす。從果向因は攝二九界色心一。從因感果は示自證本有、因果合究盡十界諸法之實相。夫れ等妙二覺竪究實相、横該十界、然則、十界自位所造善惡、其全覺體、而も等覺に不る者無、如是九界有情本來持菩薩戒、是依法を實相所以之戒體也。

依花嚴戒相。梵網所明十重四十八戒體內秘妙示之花藏受之葉上因果一體戒相遍攝萬行。

彼相は戒師壇上即蓮花臺。受戒所坐即乘上戒

師唱言者一戒光明舍那心地弟子受念金剛一心等覺心地萬行悉具之體頓於此成是爲一心金剛戒體、

梵網云、說我本盧遮那佛心地中初發心中常所誦戒光明明金剛寶戒、是一切佛本源、一切菩薩本源、佛性種子、一切衆生皆有佛性、一切意識色心是情是心皆入佛戒中、一切有心者皆應攝佛戒、衆生受佛戒即入諸佛位、位同大覺已眞是諸佛子、此金剛寶戒、名佛性戒及爲佛菩薩本源當知佛性者實相即同法華實相戒。

遂師云梵網文を釋するに二種相待、一自性本具戒、二威儀受得戒、本覺無作佛體の故に一佛法界無生死無惡無非本來防非止惡の相無く對治の戒行に非す。是を本有戒體とす。如來本自の戒行は惡の禁ずべき無く善の勸むべきなく依正の二法塵々法々自ら當位に居り悉皆本佛の變作、生佛一體の相。

○

道德律を即ち如來の神聖なる眞理に契ふべき法性に順すべき道德律を人類に律するに三意あり。一傳受、二發得。三性得。傳受とは本源舍那佛より以來師資相承す。二發得とは天崩地裂發二此戒一。三性得とは無始本有の佛性即ち金剛寶戒である。傳受とは三聚淨戒（如來の道德律を此三聚に攝して此意に發す）其儀式を以て傳受す。是昔蓮華藏界の盧舍那心地金剛寶戒を以て妙海王及び王子に授く時に我今師釋迦文佛此戒を誦持し次に阿逸多菩薩に傳ふ。如是次第相傳我今汝等に傳受す。此傳受戒を以て言說法身と爲す。若し相傳せざれば法身即ち滅す。此傳受法身が次第に傳らば三世に流通し化々絕せざれば千佛を見る事を得。

發得の相は蓮華藏界盧舍那（是は如來の神聖は道德律の淵源にしてヘーゲルが宇宙は萬物に秩序の整然ならしむる理法ある如く人の意志にも道德秩序の整へる理法なかるべからずと云ふ、如來の秩序の理を具體的に表示したるものである。）神の聖意は神聖にして人の良心を警告して防非止惡の動機となるを宗敎的に示せば、神國即ち蓮華藏界、神の具體現即ち盧舍那にある。良心に囁く神の聲が即ち道德律の宗敎律なる戒體である。戒は神の神聖なる聖意にて人の靈性に發現せる道德的意志である。一切諸佛も斯金剛寶戒の靈意が發達して成佛したのである。

盧舍那佛本因地に在りて初發心中に凡夫師に就て此戒を受く。第三羯磨の一刹那自ら身口意及び法界の色心の上に無作の戒品を發得す。一たび發得すれば後常住不滅にして一切處に徧く傾動ある事無し、乃至菩提に至る。斯作法の時の受者の心に無作の戒體發得する時の心理狀態を形容して十方法界六種に震動し汝等の自の身口意及び法界の色心に於て微妙可愛光明の形を作し天崩地裂雷震地吼の聲を作すと。此發得の戒を功得法身と名づく。若し發得せざれば法身不生。

性得とは三聚淨戒とは昔蓮華藏界ビルシャナ佛、初在因地、蒙二凡夫師開示之力一、於自心開悟、本有佛性法身戒、法身體非得佗法、若得佗法、燃燈佛所得二授記一即成佛

道、非得佗法、自修成佛、故に經中說曰、衆生自得度、佛不度衆生、一切衆生、皆於自心、開悟本有法身、一如舍那、衆生自心に本有佛性五分法身を開示す。無始已來本在汝心、無明隱弊顯はれず。譬へば狂人、如意珠有らんも、狂亂を以ての故に都て覺知せず、諸佛菩薩常欲開示汝等狂亂。汝等諸煩惱不見諸佛、今告汝等一切如來金剛寶戒法身今汝等心中本來常住萬德圓滿明如日月粧如瓔珞三十二相八十種、遍一切處無所障碍、諦信此語、是名成佛此性得戒、名爲性德法身若し開悟せざれば法身顯はれず、汝等當に能く開悟す。如是一心金剛寶戒。

傳受即ち師資相承、發得は則豁然大悟、性得は無始本有。

金剛寶戒、佛性種子、是性德種子の戒體を明す。

本有金剛は法身如來法身內證上體具の三身あり、理の三身即ち三聚なり、攝律儀は中道法身、攝善法戒即空報身、饒益有情戒即假應身なり。遂和尙云、攝律儀十重四十八心地戒藏、攝善法戒八萬四千因果佛性常住藏、饒益有情六度四攝無量行願藏。

本有三身とは衆生本本佛の分身性に二身を具す、善惡行住坐臥悉三身威儀怒體に不る無し。

寂光土

自身本來住寂光道場、居金剛不懷宮室、己心湛然而應一切、普賢觀云、菩薩戒自然成就、其佛住處、名常寂光、圓融善惡淨穢亡故、所住處常寂光、己身佗身不二圓妙、是人全同於佛慧。

正覺

如來は一切諸佛過去の諸佛現在の諸佛、一切の聖者が如實如眞に正覺を成して眞理の光明を以て眞實の際に體達する者を覺者と云ふ。如實に彼岸に到達せし聖者なり。過去の諸佛の如く同一如の眞知境に到達。又龍樹は、法相の如く解し法相の如く說き

諸佛が安穩に來る如くに來るを如來と爲す。

世尊は知る可きを知り見るべきを見眼を體とし知を體とし法を體とし梵を題とした る說示者にして義理を開示し、不滅を頒與する法王卽ち如來なり。

如來は總て煩惱を滅盡せる聖者にして過去にも未來にも正覺を成せる者は悉く皆如來なり。總て聖者は阿羅漢にして卽ち覺者もあり。已に無漏智を得たる比丘の滅度せし時に佛陀は其人の人格圓滿なるを稱して其人の心靈の追ひ捕ふべからざるを說て曰く『斯の如き心解脫の比丘は帝釋も梵天も追跡し得ず。彼等曰く如來の心識は尋求すべからずと。我汝等に告げん、現在諸法の中に於て如來は追跡すべからず。』と。

如來正遍智は如眞如實の道を以て過去の諸佛と同一の道を修し一切衆生も如來と同じく如來を師とし道を修むれば同一の佛果に到達し一切如來と共に如來たるべし。斯如實の道は一途にして衆生を淨くし生老病死を滅し正智を得て涅槃を得せしむ。

○

法華三周の說の大意

法華經に釋尊出世し衆生敎化の本懷は一切衆生を悉皆成佛せしめんとするにあり。同じ佛敎にても權大乘にては三乘の法を以て悉皆成佛を示さず。三乘の法を以て得道せしめしは方便にて實は一佛乘に歸するを以て衆生を悉く成佛せしむるにあり。

敎を受くるに衆生の機類同じからず。釋尊の本意を領解して眞實の信解が決定して成佛の記別を受くる機類に三種あり。上中下根是なり。上根は法を開いて釋尊出世の本懷を了解し、中根は譬喩を以て信解し、下根は因緣を以て領解するものなり。今法華三周の說を略して大意を述べん。

一、法。釋尊は無上の正覺を成じて一切諸佛と等しく諸法の實相を究盡し玉ふ。實相とは如是相乃至如是本末等。諸法の實相とは要を取つて云はば一切衆生の心に地獄より佛界に至る迄の相性及び十如三千の理法が本來具有して居る。衆生に十界の性能が

具して居る故に佛と成り得らるる性が有て居る。

其眞理は我自覺なり。要を云はば衆生に佛と成り得らるゝ性が潛在して居るは唯佛と佛とのみが覺了し玉ふ故に諸佛の法は衆生をして同一の成佛を期せしむるなり。然れども方便して初めに三乘の法を說きしは衆生の欲樂を滿さんが爲である。故にそは方便說である。實際の本懷は諸佛世尊は唯一一大事の因緣を以ての故に世に出現し玉ふ。一大事因緣とは諸佛世尊は衆生をして佛知見を開き淸淨を得せしめんが爲なり。また衆生の佛知見を開示し悟入せしめんが爲に世に出現し玉ふ。

故に如來は一佛乘を以て衆生を敎るのが本意なので三乘敎を說のは方便である。故に諸の衆生は諸佛に從ひて聞法すれば究竟して一切種智を得べし。故に諸佛は但菩薩を敎化し玉ふ。故に十方世界中には尙二乘何そあらんや。如來は但菩薩のみを敎化し玉ふことを知らざれば此佛弟子に非ず。諸佛出世但此一事衆生を引導して、佛知慧を說が爲、如來は實相印を說く。一切衆生をして我が如く異ること無からしめんが爲と。

一切衆生悉有佛性若有聞法者無一不成。佛の法を聞て舍利弗尊者一人眞理を領解して歡喜に耐えず。頌曰　我昔諸の菩薩の授記作佛を見て謂ひたりき。我等は何故に斯事に預らざりしと。自から如來無量の知見を失へることを傷みき。然るに今は世尊の說を聞いて始めて如來の眞道を解したり。我らも成佛得らるることを今日知り眞に是佛子佛の口より生して法化より生して佛法の分を得たり。曾て羅漢の滅度を行したらば實の滅度に非ず。若我作佛せば一切諸佛の如く異ること無けん。我定めて作佛して諸の天人師と爲り諸の菩薩を敎化すと。舍利弗が無上菩提心を以て記別を授けらる。無量劫の後成佛して花光如來と名つけ離垢淨土と。

次に(譬喩品)如來の方便說法は皆衆生を成佛させんが爲である。今更に譬喩を以て此義を明し玉ふ。譬は一の國に大長者あり其年老ひて財產無量田宅及諸の僮僕あり。其家廣大唯一の門あり。百二百の人此中に止住す。堂閣朽る故已に傾危に逼まれり。

俱時に燃然と火起て舍宅を焚燒す。長者の諸子二三十此宅中にあり。長者は大火四面より起るを見て大に驚怖す。諸子等が火宅の內に於て嬉戲に樂著して覺らず。或は墮落して火に燒かれん。我當に說て火に燒かるるを免れしめんと。具に諸子に告ぐ、海の邊りに出でよと　父憐み善言を以て誘愉すと雖ども、子等は嬉戲に樂著して敢て信受せず、驚かず畏れずに出ん心なし。又何らが是火にて何らが是舍たるを知らず。たゞ東西に走り戲れて火を視て已ぬ。時に父の長者大に惱み玉ひ此舍已に大火に燒かる。我諸子を誘て出ずんば必ず燒かれんと。我今方便を設けて子等が爲に斯宅より救はんと。父は此の子等が其好む處の種々の珍玩奇異の物を與へば必らず樂著せんと。即ち告て言く汝等が好む希有にして得難き物を與へんから速に之を取れよ。若疾く之を取らざれば必ず後に悔ひあらん。此やうに種々の羊車鹿車牛車が今は門の外に在り。出て戲遊しては如何。汝等此火宅より速に出でよ。汝等欲するままに與へてやらうと。爾時に子等は父の說なさる珍玩の物ありと聞き大に其願に適ひ各互に競ふて勇み進んで火宅を出た。是に長者は諸子等が無事に出るを見るに四　道の中の露地に坐して大に歡び躍て居る。そして諸子等が各父に白さるるに、父よ先に許し玉ふ珍好の羊車鹿車牛車を願くば我等に賜與し玉へと。時に長者は各々の子の好みに任す。一の大車高廣にて衆寶を以て莊嚴を施し四面に鈴を懸け其上には寶蓋を張りまた寶華瓔珞を垂れ　を敷き丹枕を置く。駕るに大白牛の最も膚肉の充富ける形體の大力の强き步行の速なる而して多の僕從が侍衞せり。

本來是大長者財寶無量珍寶充溢して居る。是く念ふ。我財物極りなく下劣な小車を子等に與ふるに及ばぬ。此幼童は悉皆吾子である。愛に偏黨はない。我に是やうな七寶大車が無量に有す。平等に此を與へて差別はなし。此物を假令一國に與へても遺ことなし。況や諸子をや。是時子らは各大車に乘つて未曾有なことを以て本の所望に過して豈悅ばざらんや。

舍利弗よ、云何此長者が等しく諸子に珍寶の大車を與へること寧ろ虛妄なりや。舍

利弗の言く、否世尊是長者が子等を火難を免れ其身命を長からしめんためとは虚妄ではない。何を以ての故に。若し身命を全うすれば已に珍好の具を得たのである。況や方便して彼火宅より拔濟なされしをや。世尊よ若し長者が假令最小の一車をも與へぬからとて救濟の爲なれば虚妄ではましまさぬ。況んや子等に等しく大車を與へられしをや。舍利弗よ如來も亦復一切世間の父。諸の怖畏衰惱無明の中に於て無量知見が無所畏大神力及智慧力方便波羅密具足して大慈悲の中に懈怠なく恒に善事を求めて一切を利益す。三界の朽故たる火宅に出るに衆生を度せんの爲　生老病死三毒の火を度せんが爲め教化して阿耨菩提を得せしめんが爲め、諸の衆生生老病死の憂悲苦惱に燒かれ亦五欲の財利の爲に種々の苦を受く。貪着追求して現に衆苦を受け後に地獄等の苦を受け六道悉苦である。舍利弗よ彼長者初め三車以て諸子を誘引し然してのち大車の寶物を以て莊嚴第一なるを與ふ。如來も亦如是。初めに三乘を說きて衆生を引導し然後に大乘を以て之を度脫す。何を以ての故に、如來は衆生の小根にて速かに三界を出て涅槃を求むる、聲聞乘にて、諸子の羊車を求めて火宅を出るが如し。また衆生自然慧を求め獨善寂を樂ふ、深く諸法の因緣を知る之を緣覺乘と名く、彼諸子の鹿車を以て火宅を出るが如し。若し聞法一切智佛智自然智如來智力無所畏を求め一切の衆生を愍念し安樂にし天人を利益し一切を度脫す之を大乘と名く。之を菩薩と爲す。諸子が牛車を求めて火宅を出るが如し。

（信解品）。須菩提迦栴延加葉目連は佛の未曾有の法を聞き世尊が舍利弗に成佛の記を授くるを聞て希有の心を發し、歡喜踴躍して恭敬合掌して佛に白し上げぬ。我等は弟子の中に首年老朽自涅槃を得たり。更に無上覺を求むるに及ばずと。自から空無相無作を樂つて菩薩法の遊戲神通淨佛國土成就衆生の事は心に喜樂せられざりき。何となれば我等は已に三界を出で涅槃を得。今は年已に朽邊の故に菩薩の無上覺を求むる志

は起らざりき。然るに今我等が佛前に於て聲聞に阿耨菩提の記を授くを聞いて、心大に歡喜し一同が慶幸大善利を獲、實に無上の珍寶求めざるに自ら世尊よ我等今譬喩を以て吾等が信解の義を述ん。

我等今日佛の教を聞き歡喜自ら耐ざりき。譬は童子いとけなく、父を逃れて他土に入り、諸國に流れて五十年、大に窮困して四方に馳て衣食を求む。其父先來子を求めて得ず其家富て財産や、金銀寶石充溢し、象馬車乘、僕從臣武衆多なり、出入商估賈人等、千萬群り圍繞せり、常に王者に愛せらる、群臣豪族に重らる、豪富大勢力ありき、年朽ち只子を憂ふ、夙夜に死時到るを知る我に於て五十年、此財寶を何に爲ん。

時に窮子衣食を求めんと諸國に傭はれて其身を支へ行く。飢餓にせまりて羸疾しぬ漸次に經て過ぎて父の住城に到る。傭賃を求めて辰轉し父の舍に至りぬ。長者は門に在り。大寶帳を施せる寶座にありて嚴しく眷屬圍繞す。窮子は父の尊嚴を見て國王なりと謂ひ尊貴の處我等が使役す處にあらず。若も久しく住せは或は逼迫驅使されん疾く此を去りて貧里にて傭れんと走る。長者は高座にて遙かに我子と識り、頓に使者に命して窮子を追捉來れよと。窮子は驚き怨に憶ひ氣悶絶地に倒る、此人我を捉えては必ず死は免れじ。長者は窮子の意を察し即ち方便を以て更に餘人を遣し、窮子に語るに汝を長者が傭て糞穢を掃除し汝に倍の賃を與へんと。窮子は聞き隨喜來りて不淨を掃除す。

長者に出入已に十年を經たり。家事を執る。金銀等出入示したり。自貧しく財物無しと謂ふ。父窮子の心術廣大なるを知り諸親族國王大臣刹利等の中にて曰く是定で我子なり幼にして家を逃れ他に行くこと五十年を經たり。こゝに來りて廿年、我其城にて此子を失ふ。周行此に來ぬ。凡そ我所有舍宅一切財寶之に付し、その所用に任せんと。子念ずらく昔貧しく志意下劣なり父の所にて一切の財物て獲歡喜未曾有と。

佛亦斯のごとく我等小乘を樂ふ故に我等に作佛を說玉はす。我らに無漏の法を說き小乘聲聞弟子と爲す。諸佛秘藏の法、但菩薩に說示す。我らが爲に眞要說かさりき。

我も佛の無上法を聞とも自ら願はざりし。我は自利を足れりとし唯無漏を願ひにき。我永く佛智には志願なく自ら少乘者は是究竟と謂ひにき。我は永く空を執し三界苦患を解脱し已に最後身に住し有餘涅槃に住す。我らは曾て佛子等に菩薩の法を說き諸佛道を聞くとも凡て願樂せざりき。長者の子を念ふ方便心佛亦是の如し。希有の事を現して小を樂ふ者の爲に方便の心を調伏し乃ち大智を敎ふ。我今日未曾有求めざるに自得しぬ。窮子の寶を得し如し。世尊我道果を得、無漏の法法眼淨明たり。我永く戒を持ち今始めて果報を得。法門修行　大果を得　我ら今眞聲聞佛道を一切に聞ず我ら今眞羅漢　世間天人惡魔等普供養世尊大恩希有事なり……

惑

（圓覺經）　二障　一、理障（碍二正知見一）　二、事障（續二諸生死一）

此二障有レ體有レ義。義同二唯識煩惱所知一。謂事是煩惱即障。又能續生死故。理是所知。所知非レ障。所知理を障ふるが故に此二障起信根本無明と及六染心。是事障淸淨心を染汚して展轉相生。乃至執取計名。能諸業を起して皆是生死連續義の故に。根本無明皆此理障。法界眞心を覆ふて不覺忘念生起諸法性相に達せず是正知見を障ふるの義。故彼の論に云く、是二心本より已來自性淸淨一法界に達せ

ざるを以て故に心相應せず、忽然念起を名づけて無明と爲。無明の爲に汚されて其染心、染心の義とは煩惱礙と爲。能く眞如根本智を障が故に。無明の義とは名けて智碍と爲、能世間自然業智を障ふるが故に。

今曰く、理障は如來一切知と相應すべきに未だ相應せざるは蓋し是無明覆て障る。

理｛如來—一切知—（未開—知性伏能未開發—知性は高等なるが故に後に開顯す）
　　衆生—理性—（理性は開顯にして修成にあらず）

事｛如來—一切能（衆生生理衝動の元氣なり、衆生の生命は一切能を根本とし相待世界五大性と一大元氣となり、陰陽二氣として此能を顯はす）
　　衆生—感性衆生生理一切事能

如來一大能力が相待的世界の方面に發展分現して、一大元氣として力ある物質分子として自然界に常恒造化の大用をなす。自然界と現れては相待的因果律秩序あり條理ありて常に建設事業を施すは是一切知に伴ふ一切能力なり。發展せられたる被造者世界及び衆生らは一切知の分賦は性能として伏藏し一切能力の分たる物理的生理的生活の方面が先顯動す。極大より分展して世界と現はれ、世界より發展分出して衆生と現はれ、生物界には最初原始極少の生物として分出す、是原始生物の極少なる所以なり。

能の分現、衆生生理の衝動煩惱なるもの正當なる生活目的の爲には本世界の方面に於ては敢て障碍なるものに非す。貪瞋痴等すべて生理の自然に具はれる正當なる性、必要なるものなり。然れども本生理衝動は高等なる靈性を伏能し之を顯動態に發達し、此靈的知性の光明によりて生理衝氣を指導し訓練し靈化して始めて本能を完全に開發發達して天より稟けたる職分を竭すべきものとす。伏藏の靈知性をば開發顯示し生理の能力は靈化して靈能として活動す。

此靈知伏藏態を開顯せざるを理障とす。靈能靈化發揮せざるを事障とす。

即ち絶對靈より一切能の力に發展分現せる三展衆生は靈知開顯せざる時は生理衝動が小我中心たる生理の活氣は遠心力を以て大靈の求心力に抵抗す。そは一には未だ生理的機能が靈能を發顯するの機未だ圓熟せざるを以てなり。例へば生殖機能熟せざる雌性が雄性の接するを抗する理の如し。

生物は原始の極少より內的生活の根底に伏藏せる靈性が顯動せんとの內的自發性と大靈の求心力との因緣力が自然に宇宙に存在せるを以て世界生物の進化の原則となりて生物界は向上進化す。

理障（圓覺疏）理障は正知見を障ふ。知見とは佛知見なり。本來伏藏の靈知が生理心の中に潛伏して未だ開顯せずを障とす。眞理を知見すること能はざるが故に。華嚴に、一衆生として具に如來智慧有せざるなし、但妄想執着を以て而も證得せず、各妄想を離れば一切智無師智自然智無碍智即現前することを得。

今曰く、衆生の靈性と大靈智と本來一體衆生靈性開發すれば無碍なるを得、無師自然にして修顯、修成ならず。

圓覺經に曰く若諸衆生永捨貪欲先除事障未斷理障但能悟二入聲聞緣覺一未レ能顯二住菩薩境界一

障（理）：事障／理障
執（法）：人執／法執
煩惱：現行／習氣
生死：分段／變易

圓覺に一切衆生、欲汎如來大圓覺海、先當發願、勤斷二障、二障伏即能悟入菩薩境界、若事理障已、永斷滅、即入如來微妙圓覺、滿足菩提及大涅槃、

同、一切衆生皆證圓覺、逢善智識、依彼所作因地法行、爾時修習便有漸頓、若遇如來、無上菩提正修行、根無大小、皆成二佛界一

絶對より相對に展す

楞嚴に富接那問佛世尊、若世間一切根塵陰處界乃至七大性等、皆如來藏清淨本然、云何忽生、山河大地諸有爲相次第遷流終而復始、佛言、汝所聞清淨本云何忽生山河大地、汝常不レ聞、如來宣說、性覺妙明、本覺明妙（本來の性覺の體と用）

富接那曰、唯然我　聞かざりき、佛言、汝稱覺明爲復性明稱名爲覺不明稱爲明覺、富那言、若此不明名爲覺者、則無所明、佛言若無所明、別無明覺、有レ所非覺、無所非明、無明又非二覺湛明性一、性覺必明、妄爲明覺、意曰、本性之覺必具湛明之性以不了故妄爲能明之明所覺之覺覺非所明因明立所所既妄立生汝妄能無同異中熾然成異彼所異因異立同同異發明因此復立無同無異如是擾亂相待生勞勞久發塵自相渾濁由是引起塵勞煩惱起爲世界靜成虛空虛空爲同世界爲異彼無同異眞有爲法覺明空昧相待成搖故有風輪執持世界因空生搖堅明立礙彼金寶者明覺立堅故有金輪保持國土堅覺寶成搖明風全相摩故有火光爲變化性寶明生潤火立上蒸故有水輪含十方界乃至交妄發生遞相爲種以是因緣世界相續

今曰世界有爲の發現の緣起は地水火風空識等の七大の本體眞空妙有如來藏性清淨本然周徧法界の本質一切處に充滿し方處なく循業隨緣の發現なりと。意は業は即ち業力宇宙全一の心の屬性なり一切能力の徧切力を業と爲す。其一切力は原動力となりて隨緣とは絶對より相待の因緣の方面に現れて世界全體の働きを爲すこと、此働は相互の複雜なる關係を以て爲す。然れども一として其中に因緣の關係なきはなく、故に隨緣の發現と云ふ。本絶對の如來藏性なれども業力より發現せられければ自然と相待の世界と下らざるを得す。相待と發現し來れば地水各自己の性本を以て相互の間に力の起點より合離合散競爭相互に親和し競爭し世界の相爭となりて遠心求心の兩力の關係にて種々因緣よりして世界と成立して自己の性の圓滿に發達せんが爲めの性能を具す。

根底に常恒徧動の一切能力ありて內面に具備する一切知より禀けたる性能が發現せ

るもの、爲に進化し發達して相互に休止なく進行する勢力は自然と遷流有爲の相と現はれ世界相續も此因緣による。世界は廣大の設備を以て衆生を養成す。

本覺は絶對の靈體なれば明無明を超絶したる靈體。其れを性覺妙明本覺明妙と名づけたり。本覺とは本來自爾の靈體は覺不覺を超絶したるも不覺に對して靈體と名づく、自然の圓覺なり。妙とは本體寂靜不可思議にして妙靈靈鑑不昧の故に妙明、本體の性質に靈妙明照なれども一切能力より循業に發展せられば自然と絶對より相待となり無限より有限と現じ、本體より現象となり、自然と能所の相待と現はれて見れば、本來因緣因果も無き筈なるも因と云ふ個體遠心中心の個體となりて絶對をば自己の性とは背同待比的に觀るやうなる。世界の中心點となりて遠心力が發す。

經には此門に判然せざれども前の循業と今の能所と現はれて絶對より相待に發現したる、故に無同異中熾然と異を成じ此の絶對より相待を、本體より現象に變じたる相を經に如是擾亂相待勢を成し勢久して塵を發し自ら相渾濁し是に山て塵勞煩惱を引起すと。

此に三展あり。絶對の本性より相待の因緣律となり因緣によりて世界成立し世界及衆生は悉く因緣と自然律を要する事になりし。

之を經には第一義を領會せんこと因緣に非ず、自然の性にあらず。本來第一義は絶對の如來藏性なれども一展せられたる第二義の相待的は第一義を根底とし本體とし而も現象とし相待的には自然律となり自然律は相待的に必ず因緣因果の約束なしには世界も衆生も成立すべきものに非ず。此因緣によりて世界を現出す。

經。火騰水降交發立堅濕爲巨海乾爲洲以潭是義故彼大海中火光常起彼洲潭中江河常注水勢劣火結爲高山是故山石擊則成炎融則成水土勢劣水抽爲草木是故林藪遇燒成土因絞成水交妄發生遞相爲種

（已上因緣相關世界萬物）

（衆生相續因緣）富樓那明妄非住覺明爲咎所妄既立明理不踰以是因緣聽不出聲見

不起色色香味觸六妄成成就由是分開見覺聞知同業相纏合離爲化父母同業相感愛習相纏故中陰入胎之際父母慾想交感然後托生、異見成憎同想爲愛流愛爲種納想爲胎交發生吸引同業故有因緣生渴藍過蒲曇等是因緣生相續、貪愛同滋貪不能止則世間四生隨力强弱遞相呑食是等則以殺貪爲本以人食羊羊死宿人人死爲羊如是乃至十生之類死々生々互來相噉惡業俱生罷未來際是等即以盜爲本、汝負我命我還汝債以是因緣經百十劫常住生死汝愛我心我憐汝色以是因緣經百十劫常在纏縛唯殺盜婬之爲根本以是因緣業果相續。如來證眞富樓那言若此妙覺が如來心と不增不減なれば忽生山河大地諸有爲相を生て見れは如來今妙定の眞理を以てもまた山河大地有爲漏習何當復生すべきや、佛言譬ば迷人東面を誤解して自ら悟らず若人の爲に示されて正をうる時は更に迷はざるが如く十方如來已覺已後更復不生迷前如金は雜打精金一純更成雜如木成灰不重爲木諸佛菩提涅槃亦復如是。

辨榮上人御逸事（其三）

五香善光寺　辨誠　輯錄

○

上人曰「いくら可愛い我子でも未だ自分の腹の中に在るうちに自分の腹を見て可愛いゝ子だと思ふものはない、産み出して客體として眺めることによつてはじめて可愛くなつて來るのである。宗教が客體を置くも亦然り」。

○

人曰「古來淨土宗等で、報身と云へば只だ一概に法藏菩薩の酬因感果し玉へる願成の彌陀計りに限られて居るやうに云つて居るが、本、この宇宙には自爾として一而

に於て人々の信念に報ひて歸趣せしめ給ふ一大勢力がある、これ即ち吾人が客體として仰ぐ報身阿彌陀佛である。空間的客體を立つる宗教にして時間的報身でなければ報身でないと執するは思はざるも甚だしいものである」。

○

又曰「法藏をとほして看るは舊約で、釋尊を通して見るは新譯である」と。

○

又曰「本、三身は即一である、報應二身既に人格的を許るすとせば、法身亦人格的でなければならぬ、然るに古來法身を理の一邊に執して我等往生の曉もまたこの無相なる理體との冥合を以て終局の目的として居る如きは、矢張り哲學と宗教との混同であつて、宗教としてはどこまでも、大ミオヤの御許へ歸らんとすることである」。

○

千葉縣下一地方の年中行事ともなり居れるもの丶中に「送り大師」なるものあり、陽春四五月頃多數の人々一團となりて村々に安置せる弘法大師の札處を巡拜するものにて、其間五日乃至九日にも及び全道程三十七八ケ村にも亘れるあり。到る處酒食の饗應ありてこの行を持ち、參者また之れに飽滿し、大聲に、南無大師遍照金剛〳〵と叫和しつ丶練り歩くなり。

上人常に相戒めて「送り大師の連中は多く只だ足斗りの運動だ」との給ふにぞ、或人の其所以を尋ねけるに、上人の曰「お大師さんを信仰すると云ふことは、お大師さんにお逢ひ申してその敎へのやうにつとめることである、お大師さんはどこの札處にもおいでであります、第一番の札處でも第二番でも、だからそこでチャントお目に掛かれば良いのです、が多くの人々の有樣を見るに先づ第一番の札處へ來た時その人の心は既に第二番のところへ行き、乃至最後の第八十八番の札處へ來た時はその人の心は早や疾くに我家へ歸つて晝寢をしておるやうでありますネエ、そんなことではいくら汗水流して歩るいつたといつても影ばかり逐ひ歩るくだけで、お大師さんに逢ふ日

はありませぬ。たゞ足がくたびれるだけです、だから「足の運動」だと云ふのです」。

昔し印度にこんな一つの偶話がありました。

去るところに一人の愚者ありき。一夕そが庭前に出でけるに時恰も明月に際し彼方、前方の山の端よりは圓々たる朝月の徐々として昇りつ丶ありけるを見る。彼れ即ち思へらく「かの皎々たる明月は常に彼の中にぞ棲みつらん、よし、明日は我れゆきて之れを捕へん」と。すなはち一條の繩を用意して立ち出でやがて大樹の蔭に身を潛めて月の出づるを窺ひにけるに、如何にしつらん昨夜たしかに此の山の頂きより昇り出でたる明月の、今日は處を異にして彼方なる山の上より昇り出しければ、彼大に不審り思ひけるやう「彼さかしくも今日我の來り捕ふるを知りて早くもその出處を更へたるならん、よしさらば明日は朝まだきより行き待ちて彼れを捕へん」と、未だ夜の明けやらざるより到り行きて今や遲しと待ち居けるに、コハそも如何、鏡の如き圓月ははるか彼方の山の端より嘲るが如く悠然として昇り初めけるなり。如斯にして月を逐ひ行くこと數里の彼方に及べども遂に之れを捕ふべくもあらざりければさすがの彼も今はその勇圖を斷念し、氣息奄々として我家にぞ歸へりけり。

時正に一輪の明月は中天に懸り、影玲瓏としていたらぬ隈もなかりけり。

彼取り急ぎその渴を醫さんとし、家婦をして一杯の水を汲ましむ、家婦すなはち[illegible]の玻璃器に滿々たる清水を盛りて彼の前に持ち行きぬ。彼喜びこれを口せんとして計らずもその中をのぞむや、こはそも！！ 數日逐ひ求めて遂に得ざりし明月の婉然として杯中に彼れを待つもの丶如し。

彼れうた丶、歎息して獨語すらく、

「我れ愚かにして數里の彼方に逐ひ行きて而も遂に相及ばざりし朗月の、却つて本來この杯中に棲みたりしに非らずや……」とかこちけるとかや。

上人更らに語をつがせ給はく「こちらに水がなければどこまで逐つたとて捕へられるものではない、一月天に在つて影萬水に浮ぶ。水さへあれば月は自然に來るのであ

る、今もその如くお大師さんに逢はんとするには先づ第一にこちらに信心の水のありやなしやを點檢せねばならぬ、信心の水なくして大師に逢はんとするのは恰も愚者が月を追はんとするやうなものである。

大師さんを信仰するとは大師さんの敎へを聞いてその如く實行して行くことである。大師とは大きな師匠と云ふことで、師匠とは生きた手本と云ふことである、世間でも茶の師匠花の師匠などと云ふが如し、大師とは此世一代斗りでなく人間として最も大切なことを敎へて下さるから大師と云ふのである。學校でも生徒が先生の敎へを守らず只先生に阿諛したり御馳走したりしたとて、先生は決して喜ぶものではなく、自分もまた決して立派なものになれる譯ではない、先生の敎へを能く守つて實行し有爲の人物になつてくれてこそ先生は本懷に思はれるのである、生徒も亦それが本懷である、故に生徒の本懷が卽ち先生の本懷である。

今もまたその如くいくら大師さんを供養したりお祭り騷ぎをしたとて只だそれ丈けでは大師さんは決して喜ばれるものではない、寧ろそんな者斗りが自分の信者だと思へば血の涙を出して歎いておられることであらう。

大師さんを信ずるとは大師さんのみをしへを行ふことである。

極樂の彌陀の淨土へ行きたくば
南無阿彌陀佛を口ぐせにせよ

とは大師さんの敎へである、そして、大師さんもまた彌陀の無量光によつて成佛せられた程に、衆生の苦しみは我が苦しみと、汝等も亦我の如くこのみ光りによつて永世を得よと敎へ給ふのである。この敎を外にして大師さんを信仰する道はない。

そして我々は闇黑に沈みにし我々にかく敎へ給へりし大師の恩德に對つて合掌念佛して感謝するのである。然しそれもまた先づ第一に自己が救濟されて居なければ詮ないことである」。

○

上人曰「光りと云ふものはこちらに之れを對けるものがあつて、始めて瞭然とするものである、若しうけるものがなければあつてもないやうなものだ。例へば太陽の光りでも地球でうけて反射するから地上ではよくこれを認めることが出來るが、うくべきものゝない虛空に向つて放射するが如きは、あつてもないやうなものだ。

心靈界の太陽たる彌陀の靈光も亦然り、すなはち「月影のいたらぬ里はなけれども、眺むる人の心にぞすむ」の意で、照らして餘すことなき彌陀の光明も只だ念佛衆生の信水にのみ宿り給ふのである。信念の無い衆生はその光りの中に在り乍ら而もこれを感知せないのである。これ自業自得である」。

○

上人曰「智識によらず才能によらず、只一心に念佛して如來の恩寵を仰ぐところに、その人の心の中に自然と信念の鏡が出來てくる、信仰の人は常にこの鏡に如來の光明を反射して居るから對する人々をして自づと畏敬、親愛の念を生ぜしむるのである、人よりも信頼されて來るのである。

曾て布鎌村に鳩谷某と云へる久しきより篤信の老人があつた、田舍人として別にさしたる學解素養もなかりける程に、土地の人々も初めの中にその云へる言に耳かたむくる者もなかつたが、終には相當な人までが其の云ふことを信頼して重きをなすやうになつた。これも只一心に念佛してその心想中に信念の鏡が出來、彌陀の光明がこれに反射されて對ふ人々を射たからである。」

○

埼玉縣三輪之村字加藤の地藏尊は曾て其地方一帶に惡疫流行し死者相繼ぎし折、その累々たる死屍を集めて火葬しける場所へ、亡者の冥福を祈らんが爲めに上人の御建立し給へるものなり。

一修業者あり、來り拜して上人に地藏尊の御揮毫を懇請するや、上人「地藏尊はお止しになつた方が良いでしやう」とうけがひ給はず。行者卽ち「でも、御上人は加藤

の石地藏さんを御建立になつたのでありませんか」と詰りければ、上人の曰く「はあ、あの時はあれで良かつたのです」と。

○

松戸町より時々五香へ行商する一老爺あり。時折上人の御墓前に額づきて念佛合掌するを見る、一日茶を點じてその所以を問ふ、老爺の曰く「はい、ベンネさんはワシの昔の友達だが、お念佛がスキだつたから通るたびごとにお念佛して上げるのです」と。

○

五香に近く某處に某と云へる一俠客あり。

一日某、泥酔酩酊路上に蹌踉として纔かに身を支へつゝ、ジシア〳〵と大放尿を開始してけるに、適々酔眼朦朧としてフト頭を擧ぐれば思ひきや、辨榮上人の既に傍ら近くまで來らせ給へるに逢着して狼狽措くところを知らず、而も改むるに暇なく其まゝ片手に合掌しつゝ「あゝ、お上人さんでしたか！　お上人さんでしたか！　と云ひもあへず放尿相續の中、聲高からに南無阿彌陀佛〳〵と唱へ畢んぬ。

上人後日、このことを話し給ひて、

「よく世間では、私も念佛申したい信仰は結構だと思ふが、どうも日々の活計に逐はれてツイその暇がないので云々と云ふやうな者があるが、それは大なる過りである、實際に申したいといふ心があれば放尿しながらでも申されるのでないか、藝者買ひでも惡る遊びでも初めからそんな暇が定められてゐる譯ではない、日々の忙はしい中から各自がけつかうに作り出して行くのではないか、申したいと云ふ眞實心のないものには何年經つとても申される暇なんかありはしない」と。

（附記、無學朴訥なる田舍人の腦裏にも上人と念佛との聯想が如何に深く印象せられておるかを思ひ、併せてその御化益のいかに偉大なりしかを仰きまつる）

○

善光寺落成の後、上人多く御不在がちなりき。

適々檀徒中に死亡者ありし時恰も某氏用達の途次松戸町にて上人に邂逅したりければ其旨を傳へて俱にこれより御歸院せられんことを懇請するや、上人懇ろにお十念の後、曰く「實に今日午後から東京で信者の會合がある筈ですから、私はこれからその方へ生きたものゝ引導に行かねばなりませんので――」とて遂に歸り給はず。

○

布鎌村に一老人あり、久しきより上人に歸依渇仰せる篤信の優婆塞なり、一日至心念佛の際はからずも彌陀の靈容を感見しつゝあるにや覺へけん、來り拜して吹聽す。

上人これを聞き給ひて、

「見ないものは見たと云ふし、見たものは見ないと云ふ」との給ひける。

後日老人此事を人々に語つて甚だ不機嫌なりき。

○

上人曰「人は褒めれば大抵失敗するものだ。だから自分のことを餘り褒めたりはやしたりする者必ずしも親切な者ではない、むしろ惡魔の誘ひかも知れぬ、己が敵こそ最も親切な所以である。自分が非難攻擊されるのは何處か自分にそれ丈けの缺點があるのではないか、人は人の非難攻擊の中に反省してこそ益々向上して行けるのである、恰も劍を習ふに相手からヤレ面に隙がある　胴が空いて居ると非難攻擊してくれるから己れは之れに琢磨されてやがては其道の達人とも成れるのである。故に敵こそ實に我が親友と感謝する所以である」。

○

上人曰「人はよく艱難を嫌ふが、然し未だ艱難を經ずして英雄豪傑たり偉人たりしたものはない、艱難こそ實に其人をして成就せしめ給ふ唯一の恩寵である、換言せば人生れてまだその艱難の何たるやを解せざる者はまことに人生の一大不幸事である。如來の囑望を離れた者だ。丁度寶玉師が多くの瓦礫中より、これを琢磨せばやがては

寶石に成りうべきもののみを選擇して磨き上げる樣なもので、琢磨せられるものは他のものに比してそれ丈け囑望されて居るのである。又かの正宗の銘刀は其昔、孝子正宗の手は或は烈火の中に入れられあるは水中に投ぜられて艱難辛苦を嘗めさせられて漸く鍛へ上げられたから遂に今日の榮譽を博して秘藏されて居るのであるが、その時己れは高見の見物だと凉しい顏をして居た鐵窓の兄弟（鐵棒）は今頃何處へ行つたやら、腐れ果てゝあと形もない。

艱難汝を玉にす、艱難こそ實に如來が我々の頭上に加へさせ給ふ唯一の恩寵である。

○

上人、五香地方にて、ヨク例に用ひ給ひしは玉子の例と、稻の譬喩にて人々亦既にこれを記憶せり。

一日、末弟ひとり上人に隨行してける時、突然顧みさせて「信仰せざる人々の心靈は如何なり行くや」と問はせ給ふ。末弟得たりと即ち前話を提し、例へば親鷄の懷に守られざりし卵の遂に腐れ果てゝ雛の孵化しえざる樣なものであります。と答へ參らすや、更らに語をつがせ給ひて「腐れ果てゝ何もなくなつて仕舞ふか」と追窮せられしに、否ナ、うじ虫になつてしまひますと答ふ。上人無語。

行くこと數歩、問ひ參らせて云ふ「復活の雛、再び還つて流轉の卵を產み出しますか」否ナ、ソレハ一の例である。と上人は微笑し給ふ。

○

上人曰「西方十萬億の彼方に佛身佛土をたてると云ふことは釋尊の本自說ではなく、印度古來よりの傳說に美くしき夕陽沈む西方の彼方に不寒不暑常樂無惱の世界があるやうに思つて之れを須摩提と云つてあこがれて居たのに順應せられて其中に本自說の阿彌陀佛を說かれたので即ち阿彌陀經にある光壽二無量の阿彌陀佛である。光壽無量なるが故に今現にこゝにましまして說法し給ふのである。

又曰「奈良の大佛でもすぐその直下から上を拜んだのでは鼻の穴が見へる位いで少しもありがたい味を感ずるものではない。美術品でも一定の距離をへだてゝ見るから價値が生ずるのである。今も亦その如く、六十萬億の佛身は奧行十萬億土の本堂に安置してこちらから拜むと丁度ありがたく拜せらるゝのである。

○

（昔婆子あり、一庵主を供養して二十年を經、常に一の二八の女子をして飯を送りて給侍せしむ、一日女をして抱宣して曰はしむ、正に與麼の時如何、主曰、枯木倚二寒巖一三冬無二暖氣一、女子歸り婆に擧似す。婆曰、我二十年祇箇の俗漢を供養すと、遂に遣去せしめて庵を燒却す）（五燈會元、六）

上人五香御在院中たま〳〵附近に女あり、一夜深更來宿て愁情をのぶ、上人曰「寒むければモチトこちらへお寄りなサイ」と平然たり。女愧ぢて遂に歸らず。

（以下次號）

大正十五年三月廿五日印刷
同　廿五日發行
誌代年七冊一圓二十錢（郵稅共）
年十二冊二圓（郵稅共）
編輯兼發行人　山崎辨成
東京市小石川區茗荷谷町九八
印刷人　小林七太郎
東京市小石川區水道端二ノ四四
發行所　ミオヤのひかり社
振替東京六六八五一番